

霊 聲

れ い せ い

2008年10月 (第173号)

北米ホーリネス教団

OMS Holiness Church of North America

www.omsholiness.org

reisei@omsholiness.org

御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。(コリント第一の手紙2章13節)

われ聖なれば
なんじらも聖なるべし

戸田ジョージ

(引退牧師)

私と教団とのかわりは一九三〇年にセンタービル・ホーリネス教会のサンデースクールに出席していたところにさかのぼります。センタービル(現在のフリーモント)はサンロレンゾ・ホーリネス教会のアウトリーチでした。末広栄司牧師が聖書物語を話したのを現在も覚えています。そのころ、サンロレンゾ教会や教団の他の教会のことは何も知りませんでした。私の母は教団の伝道によってクリスチャンになりました。父は日本で洗礼を受けたものの主から離れていましたが、キリストのもとに立ち返り、別人のようになりました。戦争中、一九四二年に、私たちはユタ州のトパーズ収容所に送られ、それからシカゴに移りました。両親は、葛原定市牧師と黒田



Pat 夫人と共に

章牧師が牧会していたレークサイド日系キリスト教会に通いました。私自身はレークサイドに出席していませんでしたが、二人の牧師を通してホーリネス教団とつながりを持ちました。一九五四年に私は兄と一緒に篠田ダニエル牧師に会いに行き、篠田先生によって兄は教団に加わることになりました。兄夫婦のジムとアリスは一九五五年にシカゴから引越越し、キャンベル・ホーリネス教会で牧会を始め、私もカリフォルニアに来て、パークレー・クリスチャン・レーマン教会で奉仕を始めました。パークレーにいた時、サンロレンゾ教会や教団の他の牧師―黒田章牧師、木村連牧師、また常石アト牧師たちと親しくなりました。私は、こうした先生がたが伝道的で、御言葉に堅く立ち、祈りに励んで

いたことを感謝しました。それで、一九五九年に教団から招きがあった時、私は喜んで教団に加入しました。私の最初の任命は、ロサンゼルス・ホーリネス教会で黒田牧師のもとで副牧師として奉仕しました。その後、サファナンド、サンタクララ、ホノルル、ウォルナッツ・クリーク、そしてサンロレンゾに任命されました。

私たちの多くは教団の歴史を知っています。教団は祈り会から始まりました。教団は祈りを大切にしてきました。教団創設牧師、葛原先生は祈りの人として知られています。葛原牧師は、きよい生活をし奉仕の力を得るためには聖霊に満たされる必要があることを若い人々に教えました。私は、私の奉仕において、このことを教えるように務め、その教えの通りに生活することに、出来るかぎり励んできました。このことは私たちが、これからも教え続け、実践し続けなければならぬことです。

私が教団に加入した時、ほとんどの日語牧師はウエスレー主義神学を学び、二世牧師たちの大部分はカルヴァン主義、もしくは、穩

健カルヴァン主義の神学校で学んできて、ことに気付きました。聖化に関して、ウェスレー主義とカルヴァン主義は違った見解を持つています。最初に牧師リトリートが持たれたころ、聖化について話し合ったことがあります。それはとても良いディスカッションでしたが、それで両者の見解が変わることはありませんでした。互いにそれぞれの見解と立場を受け入れ合うということで合意したことを覚えていきます。日語牧師たちが、私たちに、その聖化の体験や描写を、受け入れ同意するよう主張しなかつたことを、私は感謝しました。私たちは、一方の見方が正しく、他方の見方が間違っているとは考えていません。私たちは、聖化の教えが教団の中で重要な位置を占めているということについて合意しています。それで、二世牧師が誕生してから六〇年以上もの間、両者が共存してきたのです。二世牧師の神学に疑念を持つていたある日語牧師は、二世牧師とともに働いた後、二世牧師が決して異端的でないことを理解したと言っていました。

レビ記11章44節〜45と第一ペテロ1章15節〜16節に「あなたは聖なる者となれ。わたしは聖なる者だからである。」とあります。聖なるお方はただ一人、イエス・キリストです。聖なる者となることは、キリストに似ることです。それで私は、でき得る限り、私の生活と奉仕がイエス・キリストの生涯に倣うものとなるよう励んできました。しばしば失敗しましたが、キリストは恵み深く、私を見放されませんでした。

しかし、ホーリネスはどのような生活の中に表現されるのでしょうか。それはどんなふうなものなのでしょう。使徒パウロはピリピ人へ手紙の中で、私たちの生活の中に統合されなければならぬキリストの心について次のように書いています。「互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至

るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」(ピリピ2章5節〜8節) この聖句に挙げられている性質を持つことが、私にとつて、キリストに似た者になること、すなわち聖なる者となることなのです。

それは、第一に「謙遜」です。キリストは神と等しくあることをあらゆる犠牲を払っても保たなければならぬこととは考えませんでした。キリストは父と等しくあることをどんな面でも最大限に發揮しようとはしませんでした(六節)。キリストはご自分を無としました。すなわち、ご自分のすべてと自己中心性を明け渡したのです。第二は「誠実」です。キリストは父との関係の中におられ、その独自性において真実でした。キリストはご自分に真実であり、父に對して真実であり、その結果、他のすべての人々に對して真実でした。

第三は「僕の心」です。キリストは、僕の性質を取りました。それで「わたしは仕えられるためではなく仕えるために来たのである。」と言われたのです。キリスト

が弟子たちの足を洗われた光景は、キリストの僕としての性質を力強く宣言しています。

第四は「服従」です。キリストは死に至るまで従順でした。ゲツセマネの園でのお苦しみは、キリストが死を予感してどんなに後ずさりされたかを描いています。けれども、キリストはついに神の御心に従順に、全く服従されたのです。

謙遜、誠実、僕の心と服従、すべてを明け渡し、全く神に頼るところとは、ホーリネスと、聖靈に満たされることと同義語です。ホーリネスの証は教会で、日曜日の朝だけに限定されるものではありません。それは毎日、空港で、学校で、職場で、家庭で、人生のあらゆる状況の中に見られなければならぬものです。聖靈に満たされることは、神の声に聴き、従順に応答し、自己と自我を捨て、へりくだって僕となり、神があなたを通して働かれるのを妨げず、あなたの生涯の中に、またそれを通してなされた驚くべき事柄の故に、神を褒めたたえることなのです。

新任牧師の紹介

思いがけない神の導き

中島 光成 (なかしま みつなり)

(ノースカウンティ教会 牧師)

「ぼくはどうしてここに居るのだろうか。」

二〇〇七年夏のある日、コミュニティプールで息子の和基を遊ばせながら、雲一つないカリフォルニアの青空を眺めてふと思いました。数年前には、留学することは現実的でありませんでしたし、アメリカで牧師になることはさらに想像もできませんでした。

私は、東京聖書学院、基督教兄弟団聖書学院を卒業し、一年目は栃木県にある兄弟団真岡教会という所で奉仕しました。妻・由美子と結婚に導か

れた後、母教会の兄弟団一宮教会へ転任となりました。

いつのころからか私は、もし牧師になるように導かれたら一宮教会で奉仕したいと思っていました。比較的大きく、集っている人たちも老若男女いろいろで、青年の活動も活発、海外の働きとのつながりも深い教会です。私にとって、ある意味居心地の良い、将来性のある、やりがいのある働き場だと思っていたのです。

また、聖書学院の恩師、教会の方々、家族も、私がそこで牧師をすることを喜び、期待をしてくれていました。

けれども、神様の思いは違うところがありました。私は次第に一宮教会で奉仕を続けることに非常な違和感と困難を感じるようになったのです。

それは、私にとつてとても苦しい経験でした。学生ころから教会中心に物事を決断し、多くのものをあきらめてきた私にとつて、一宮教会を離れることなど考えられないことでした。また、そうすること

は私がこれまで生きてきたすべてを無駄にすることのようには感じました。同じ時期に、東部メノナイト神学校での争い事に関するキリスト教神学をベースにした具体的な学びについて知りました。今思うと、神様からのさまざまな形でメッセージであったのだと思います。そして、これ以上一宮教会で奉仕を続けられないというような霊的な重い促しを感じ、私は涙とともにそこを離れることになりました。

渡米後、英語の学びから始め、私には新しい分野であった紛争に関する学びに神様の導きを感じ大学院で学びました。そこで、修復的司法という人間関係の回復を中心に置いた問題解決の方法に出会い、大きな影響を受け、神学校では、その修復的司法の神学的根拠を中心に学びました。これらの学びは、結果として自分の実存に深く関わるものとなり、私の内側に大きな癒しと和解の重荷を与えました。

そして更に、牧師として働きつつ学びを続けられる道はないかと祈り始めました。そんなに都合よく事は進まないかとあきらめかけた時、ノースカウンティ教会が山口光先生の後任牧師を探していることを聞き、導きと信じてやってきました。

この一年間で在米日本人の霊的必要、異文化間結婚の諸問題、在米日系人社会とそこにある教会の苦闘を目の当たりにしました。ここにも、御言葉が語られ、御言葉の実践がなされる必要が大いにあることを感じています。主に祈り委ねつつ、できることを精一杯させていただきたいと願っています。



中島光成・由美子夫妻と和基くん

北米のリバイバルに貢献した人々

オレンジ郡教会牧師 杉村 宰

さて、私たちの先達は一九二〇年「東洋宣教会・羅府教会」という看板を掲げて南ハリウッドにあるトリニティ教会内で、その働きを始めた。その教会は東洋宣教会の本部ではなかったかと言われるのだが、実際はハリウッドの小高い丘にあるクラークという知人の家が本部として使われていた。

そのトリニティ教会にはカリフォルニア・バイブル・カレッジがあり、平野俊雄や八尋丈市らが学んでおり、中田重治とともに日本ホーリネス教団を起こしたチャールズ・カウマン夫妻と懇意にしていた牧師の教会であったようだ。宣教にとっても力を入れていたようで、そのような関係でカウマン夫



妻と結び付きがあったのではないかとと思われる。チャールズが召された時に、その教会で葬儀が執り行われている。

カウマン夫妻の住まいもその建物の面しているホバート街二五六番地にあり、彼らの住んでいた家は「リトル・ブラウン・バンガロー」と呼ばれ、聖歌三四〇番「リトル・ブラウン・チャーチ」がテーマ・ソングとして歌われていたようであった。そのペランダからは馬がのどかに草を食む風景が心を和ませていたということだが、今では想像できない牧歌的風景である。

先月の八月中旬に「私たちのルーツを訪ねて」と題してロサンゼルス教会の二十数名の方々と、トリニティ教会のあった地に足を運んだ。現在は修道院らしき建物に変容しているが、つい八十数年前に先達が主の教会を建てたことを思う時、時空を越えて彼らの救霊に対するパッションが伝わってくるようで心が燃やされたのである。

ホバート街と一九二四年に建てられた羅府教会とはウエスターン・アヴェニュー一本で結ばれていることもあって、良く行き来していたようだった。特にカウマン夫人と七人の侍たちとは昵懇（じっこん）の仲であったようで、その一人、平野俊雄のアメリカン・ネームはチャールズであったが、カウマン夫人のご主人の名をいただきたいものだった。

その後、「私たちのルーツを訪ねて」ハリウッドからホイティアに足を運んだ。そこは私たちの教団の萌芽となった第一フレンズ教会がある。この教会では二〇世紀当初一千二百人にも及ぶ人々が集まっている。これはクエーカーとしては全米で最大の教会であった。特に彼らは平和主義者であり、弱者、迫害の中にある人々に対する援助の使命に燃えていた。そこで当時、迫害の渦中にあった日本人の救霊に心血を注いでくださったのである。その担当者が土浦で牧会をしていた木田文治であった。その教会に着いた時には、もうすでに日曜の午後四時近かったこともあり、教会は閉まっていた。そこで教会の裏手にある記念館の前のベンチに陣取って、しばし当

時の七人の侍たちの働きを思い返し、クエーカーの日系人への一世紀にも及ぶ献身的貢献を話させていただいた。

当時の先達が通っていた建物は無い。現在のものは三番目のもので、しかもそれもリモデルされている。当時の面影とて一つだけになるのだが、ここで私たちの北米ホーリネス教団が教会として看板を掲げる一九二〇年までの少なくとも五年間は、ここで彼らが聖書研究をし、伝道をし、同胞の救霊に心血を注いだのであった。

その当時を思い起こし、懐かしさのあまり、中田羽後は先の聖歌三四〇番に『村の小さき教会』という日本語の作詞を創作したのであった。彼がロサンゼルスを去って三七年後の一九五七年のことだった。

その先生のパッションが青年たちの心を奮い立たせ、それがリバイバルの炎となって燃え、やがてハリウッドに移った青年たちは自分たちの手で教会の看板を掲げたのであった。そのころは中田羽後はお父さんの中田重治監督と全米伝道ツアーに出て不在だったが、私たち北米ホーリネス教会創立の火付け役となったのであった。



新生と聖化

東フランク

(サンタクララ教会)

一九五五年の夏、イチゴ会社の

閉鎖に伴い、庭園業に従事すべく、親子五人で引越して来た隣が、当時、キャンベルにあるアッセンブリー教会を借りて、土曜日の午前に集会を持っておられた若谷さんご夫妻でした。次の土曜日から子供たちはサンデースクールへ、ワイフは小さな夜の日本語の集會に行くようになり、クリスマスには洗礼を受けてしまいました。

私たちの家庭は完全に一八〇度の転回をしてしまいました。残された自分はそれからの五年、家族をサポートするという大義名分と何か割り切れないものを感じながら、教会の定期集會をポイコットするようになりました。しかし、家庭集會とか、講師を招いての伝道集會には結構喜んで出席していました。



小枝子夫人と共に

やがて教会の様子を知るようになると、生来律法的な私は、一人の信者の無神経な公德心の無さが気になりだし、いつしかその人への憎しみにまで発展してしまいました。多くの教友家族の祈りをよそに五年の歳月が経ってしまいました。神様はこの間、愛と忍耐をもつて私の心に働き続け、知識的にはホーリネスの強調する四重の福音、神、罪、救いの教理を教会を通して教え続けてくださいました。そして、一九六〇年、聖霊の働きの濃厚な平松実馬師を迎えての特別集會に於いて救いを経験いたしました。平松師の「子よ、安かれ、汝の罪赦されたり。」との宣言が頭のとっぺんから身体中に響き渡った時、自分は救われたのだという実感で心が感謝と喜びに満たされました。そして、あの憎し

みも跡形もなく消えていました。

救われた後の私の生活は、喜び、感謝、奉仕へと変わり、充実した平和な生活が八年ほど続きました。しかし、突然のように大きな試練が私たちの家庭に降りかかってきました。当時、ドラッグの悪習慣が小学校にまでまん延し、四人の子供の末っ子で十二歳だった娘が女友達四人とマリファナを吸っているという知らせに、大きなハンマーで頭を殴られたようなショックを覚えました。その日を境に、家の中の時計が狂ったように、一家全部の者が何物かに振り回されるような生活が始まりました。自分の八年間の信仰もどこかへ消えてしまい、なすすべも知らず、カウンセラーへ、補導所へと、おろおろ駆け回る毎日でした。

そんな中で、一九六八年のサンタ・バーバラの修養会を迎えました。追いつめられた私は、秘かに、あの山で主と対決すべく出かけました。「娘をあの悪習慣から解放してください」と。その年の講師は、小原十三司師ご夫妻と羽鳥明師でした。断食祈禱をしながら、一日目、二日目と過ぎ、三日

目の午前の集會の時、突然、電流のようなショックが頭からつま先まで駆け抜けました。身体中、力が抜けてしまったような、いまだかつて経験したこともない解放感と平安が全身全霊を占領していました。予想もしていなかった方法でのこの祈りの応答に、「これは一体何だろうか。」と怪しむその時、細い御声を聞いたような気がしました。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」(マタイ11章28節)

イエス様が最善をなしてくださいと信じてお任せする信仰をいつしか忘れてしまつて、自分で何とかしようと駆けずり回っていた不信仰な自分。「神様、不信仰な私をお赦してください。娘のこともすべてあなたにお委ねします。」その瞬間、自分の心の中にあつた重荷は嘘のように消えて、自由な平安を与えられました。そして娘もいつの間にか悪習慣から解放されて、学習に身を打ち込むようになっていました。

ハレルヤ！ 主の御名を賛美します。

教団ニュース

■二〇〇九年牧師リトリート

一月二六日(月)～二九日(木)

場所 Water Doloresa Retreat Center
オンラインにて登録できます。

■総会で選出された今年度の常務委員、司法委員は次の通りです。

*常務委員

議長：中馬リック師

常務書記：藤岡二郎師(日本語)

山下ゲリー博士(英語)

教会開拓：ロバーツ・ジョー師

伝道：永井祥太郎兄

教育出版：島田直師

福祉：横溝ブライス兄

ペンション：オーブン

教職任命：辻村ルース姉

ヴィジョン：溝口俊治師

(一月以降は高吉千恵子姉が復帰)

財務：知念ドリス姉

玉川フエイ姉

教理調査：鈴木栄一師

世界宣教：富田せつ兄

*司法委員

安次富ケネス師、杉村宰師

中尾邦三師、東フランク兄

斉藤ウォルター兄

■日語部牧師サミット

四月十三日(月)～一六日(木)

場所：Rancho Capistrano

■日語部牧師夫人リトリート

二月一五日(日)～一七日(火)

場所：Miracle Spring

Resort & Spa

■サンタバーバラ夏期修養会

七月一日(水)～四日(土)

場所：ウエストモントカレッジ

講師：藤本満師(インマヌエル)

高津キリスト教会(牧師)

登録：二〇〇九年四月五日開始

教会ニュース

■南加九教会合同チャーチキャンプ

二〇〇八年一〇月三日～五日

会場：パインバレー・バイブル・

コンファレンス

講師：石田コーリー師

(エバークグリーン・バプテスト教会主任牧師)

テーマ：「忍耐と喜び」

申し込み：岡本シャロン姉(英語)

日本語への通訳があります。

同時進行で子供やユースのプログラ

ムもあります。

■一〇月十一日(土) ロス・ガト

スで「祈りのための一日リトリート」が行われ、中尾邦三師がリ

トリ・マスターとして奉仕しました。今回の「祈りのリトリート」に関心のある方は、中尾邦三師までお知らせください。

■オレンジ郡教会は、創立三〇周年記念の一環として『ヨセミテ牧師の石叫366日』を出版いたしました。杉村牧師が二十数年間、毎週週報に書いてきた『石叫』をまとめたものです。未信者向けに書かれています。伝道用にお用い下されば幸いです。一冊二〇ドルでお分けしています。

■ホノルル教会 会堂建築のためのファンドレイズが始まりました。

▼このレターは、ワードを使って編集しているが、実際に備わっている機能の半分も使いこなしてないと思う。▼多くの方々の協力により、今号も無事に発行できたことを感謝したい。▼私は神から与えられた賜物を十分に活かして用いているだろうか。考えさせられた一時であった。(真)

編集室から

新刊案内

『ヨセミテ牧師の
石叫366日』

杉村宰著

1冊 \$20

ご購入は、オレンジ郡教会までご連絡ください。

教団所属教会

(カリフォルニア)

フリーモント教会

サンロレンゾ教会

サンタクアラバレー教会

ウォルナツククリーク教会

ロサンゼルス教会

サンファンド教会

サウスベイ教会

ウエストコビナ教会

ウエストロサンゼルス教会

オレンジ郡教会

アーバイン伝道所

ホイットピア教会

サンディエゴ教会

ノースカウンティ教会

(ハワイ)

ホノルル教会

ウエストオアフ教会

ミリラニ教会

(アリゾナ)

ツーソン教会

(詳しくは www.omsholiness.org

を参照)